

夫の離職に伴う妻の反応：世帯間の異質性に着目して

Wives' Responses to Husbands' Job Loss: Heterogeneity among Households

H27海人17

派遣先 The 27th Annual Conference of the Society
for the Advancement of Socio-Economics (UK・London)

期 間 平成27年7月1日～平成27年7月5日(5日間)

申請者 東京大学 大学院経済学研究科 博士後期課程 福 田 隆 巳

海外における研究活動状況

研究目的

従前女性の社会参画が抑制されてきた南欧諸国において、女性の有償労働参加が近年とみに増加しており、とりわけスペインにおいてその傾向が著しい。本研究は、European Community Household Panel for Spain (1994-2001年)のマイクロ・データを用いて、同国の既婚女性の労働参加パターンについて実証的な知見を提示するものである。本研究の最終的な目的は、既婚女性の労働供給行動への理論的・実証的な含意、および政策的含意を得ることである。

海外における研究活動報告

今回参加した社会経済学会 (*the 27th Annual Conference of the Society for the Advancement of Socio-Economics: SASE*) は、経済学、政治経済学、経営学、組織社会学、心理学など広く社会科学分野を対象とした学際的、グローバルな学会である。社会経済学会・第27回年次集会は、英国・ロンドンのThe London School of Economics and Political Scienceを会場とし、研究大会のテーマは“*Inequality in the 21st Century*”であった。

発表内容は、「夫の離職に伴う妻の反応：世帯間の異質性に着目して」という題目で、労働経済学の分野に属する研究の発表を行った。これまで蓄積のある、夫の(非自発的)失職に伴う妻の労働供給行動の議論に対し、夫婦の学歴の組み合わせパターンによるその違いの視点を実証的に試論として提示した。妻の労働供給行動として着目したのは、労働時間の変化と就業行動の変化であり (*intensive & extensive margins*)、異なる学歴の組み合わせの夫婦間での妻の労働供給行動の違いの分析結果、およびその長期的ないくつかの含意(社会における夫婦の*sorting*の動態によって妻の労働供給パターンが変動)等を報告した。多面的な観点から妻の労働供給行動(恒常的要因と短期変動的要因への反応)を捉えるため、推定方法には*correlated random effects (CRE) models*および*fixed effects (FE) models*の2つを用いた。

報告に対しては多くのコメントをいただき、全体的にポジティブな意見をいただいた。会場からいただいたコメントおよび自身の把握している今後の主な研究課題を要約すると下記の通りになる。(1) 夫婦の*sorting*メカニズムの議論の強化、(2) 経済情勢の局面(時期)が異なる EU Statistics on Income and Living Conditions:

EU-SILC (2004年～) データへの研究の拡張、(3) 動学モデルへの分析の拡張、である。とりわけ本学会への参加で得た大きな収穫は、EU-SILCデータ (構造) にかんするいくつかの情報・コメントを得られたこと、および当該データを用いた実証研究の報告に触れることができた点であると考えている。欧州のマイクロ・データにつき欧州の人々から情報を得られ、近い将来の自身の研究の国際比較研究への発展可能性を感じ取ることができた。

また、興味深い他のいくつかの報告をきくこともできた。縦断的データを用いた欧州各国における学歴同類婚の趨勢、家族内における世代間の富・資産の移転、女性の学歴と出生行動、各国における再分配政策への意識の差異についての研究などである。とりわけ、資本主義の多様性を人々の意識の面から検討した、各国における再分配政策の選好の差異についての研究報告が興味深かった。時宜にかなった重要なトピックであることから関心を

寄せることができ、加えて、本研究大会のテーマとつながりが深いトピックだと感じた。多様な分野の視点から、研究大会のテーマである“*Inequality in the 21st Century*”について触れることができ、大変有意義な経験ができた。大きな学会に参加する意義を実感した。

本学会に参加した当初の目的は、研究の入り口として、欧州のマイクロ・データについての情報を得ること、および欧州の人々から自身の欧州を対象とした萌芽的研究についてコメントをいただくことであった。その目的は十分に達成でき、また、研究の視野やネットワークを広げられるなど得るものが多かったと感じている。他方で、データ分析への技術的なコメントは少なかったため、今後は専門分野に特化した学会へ参加することによって、その点を補っていき自身の研究を深化させたいと考えている。末筆ながら、今回の派遣につきご支援くださった村田学術振興財団御中に心より感謝申し上げたい。